

# カラカス日本人学校における国際理解教育の実践

前カラカス日本人学校 校長

北海道川上郡弟子屈町立美留和小学校 校長 榊 勉

キーワード：運動会，修学旅行，現地校，交流，治安

## 1. はじめに

南米に縁があり、平成元年から3年間、キト日本人学校（エクアドル）に派遣され、22年後の今回はカラカス日本人学校（ベネズエラ）に派遣された。今回の派遣では、キト日本人学校で経験したことを生かしたいという思いも持っていた。

カラカス日本人学校は、カラカス市内から約20km、閑静な住宅街の中にあり、児童生徒はスクールバスで登校している。普段の授業は校長を含めた派遣教員5名、現地採用の常勤講師（日本人）1名、週2回勤務の語学講師（ベネズエラ人）1名で行っている。派遣初年度は「すべては子どもたちのために」を、2年目は「子ども達一人一人の成長を願って」を、3年目は「汗と涙」を合い言葉に、少人数指導に力を入れ、熱い教育活動を展開してきた。

ベネズエラは物価上昇率が政府発表でも毎年30%程度の高さであり、特に2013年の物価上昇率は56.2%という驚異的な数字となった。しかし、これはあくまで政府発表の数字であって、実際にはもっと物価が上昇していると思われる。物価上昇に伴って、現地採用従業員の給与もアップしなければならないため、授業料等の校納金は毎年、相当額を値上げしている。ただ、カラカス日本人学校の設置団体である二水会（進出企業の団体）から多額の寄付をいただき、現在は財政的には比較的安定した経営を行っている。

特色ある教育活動として、日本文化の理解と発信のために18年前に創設されたカラカス太鼓を継承し、大使館主催の日本文化週間や運動会、学習発表会、現地校との交流の時等に発表している。

また、治安の悪化による行動範囲の規制があるなか、少しでも現地理解を深める場を設けようと、警察署や消防署、中心街の公園、郊外のカカオ農園などへの社会見学も積極的に実施してきた。カラカスのシンボルであるアピラ山への登山も伝統的な行事の一つである。

小学部5年生以上を対象に実施している2泊3日の修学旅行や夏に実施する運動会、緊急避難訓練を兼ねた学校での宿泊学習や、保護者の協力で行われる餅つき大会等も子ども達が楽しみにしている行事となっている。

ベネズエラは大変治安の悪い国である。平成26年2月以降は反政府勢力の大規模集会やデモ行進、それに対抗する政府側の集会や攻撃などにより、治安も一層悪化し、通学路の確保がままならない日もあり、臨時休校や授業の繰り下げ、派遣教員が児童生徒宅を訪問して指導する訪問指導を行ってきた。

この実践記録では、治安の悪い状況でもカラカス日本人学校が実施してきた国際理解教育の中から、運動会と修学旅行、現地校との交流を紹介したい。

## 2. 参加者300人の運動会

運動会実施時のカラカス日本人学校の在籍児童生徒数は10名前後であったが、運動会には毎年300名を超える参加者があった。この半数以上は日本企業従業員や大学生、日本語を学習中で日本に興味を持っている等のベネズエラ人で、運動会では彼らの優しさや陽気さを身近に感じることができる。ベネズエラ人が参加する競技としては、徒競走・かけっこ、玉入れ、一般綱引き、パン食い競争、地球おくり、大玉転がし、チャンス走、一般リレー等があり、ベネズエラ人と児童生徒をはじめとする日本人と一緒に出場する。開会式で行うラジオ体操はベネズエラ人にとってはなかなか難しいものであるが、一緒に楽しみながら行っている。また、開会式や閉会式での大会長（校長）や来賓の挨拶は日本語だけでなく全員がスペイン語を交えて行っているのは勿論である。そし

て、参加者全員が紅組、白組に分かれて行う応援合戦は、児童生徒が参加者をリードし、盛り上げる。この運動会を通じて児童生徒は、人種が違って仲良くなれることや一緒に活動できることを体感する。また、参加者の前で堂々とスペイン語で挨拶したり、スペイン語で応援合戦のリードをしたりして、邦人の大人だけでなく、ベネズエラ人の大学生や大人達とも堂々と交流を深め、国際性を身につけると共に自信を持つことにつながったと思われる。



みんなで盛り上がった応援合戦

特に私以外の派遣教員が入れ替わった平成24年度は、年度が始まって2ヶ月しか経たない時期に運動会を実施するのは厳しいかもしれないとの心配もあったが、新しく派遣された教員の努力で、保護者から「経験者がほとんどいないにもかかわらず、とてもスムーズに運営されていた」という声をいただくなど、素晴らしい運動会となった。教師一人ひとりの力量とチームワークの良さが光った運動会だった。平成25年度の運動会は児童生徒、教職員の構成が変わらなかったこともあり、カラカス太鼓（和太鼓）の披露も行うことができた。

### 3. 視野を広げた修学旅行

カラカス日本人学校の修学旅行は以下の5つの目的で実施される。①ベネズエラで活躍する日本人関係者を訪ね、国際理解に対する積極性を養う。②興味関心を持って諸施設を見学し、見聞を広める。③安全で的確な行動ができる力を育てる。④自然の素晴らしさを体験する。⑤団体行動、グループ行動を通じて、社会性・公共心・責任感を養う。

この目的のもと、平成23年度は進出企業であるトヨタ自動車の全面的なバックアップを受け、トヨタの工場のあるクマナ、観光地として有名なマルガリータ島を主な旅行先として修学旅行を実施した。下見では飛行機やフェリーの時間も正確であったが、実際の修学旅行では、飛行機の長時間の遅れやフェリーの突然の欠航など、ハプニング続きであった。フェリーが欠航したときに、トヨタの工場長さんがホテルを提供して下さり、児童生徒が暑さと過労で倒れないように配慮して下さったことを昨日のように思い出す。

24年度は前年度の反省を受け、前年度以上にいろいろな場面で、裏番組などの緊急時の対応をあらかじめ考えて旅行に臨んだ。日本企業日立が大きくかかわっているグリダムの見学やデルタデオリノコでのボートツアー（川イルカとの遭遇やピラニア釣り体験）、国営企業である製鉄のシドールの見学など、子ども達にとっては興味深い体験となった。この年は4月に派遣されたばかりの教員が修学旅行を担当し、無事に（中南米ではこのことがとても重要）しかも子ども達にたくさんの感動を与えた修学旅行となった。これは、派遣教員の努力は勿論、現場を良く知っている方を紹介してくれたり、ボランティアで案内をしてくれたりした、たくさんの日本人関係者の親身な協力があったからである。治安の悪い当地では修学旅行はもとより、各種学習活動を行う場合に、当地在住の方々の協力が必須である。そのためにも、校長はじめ派遣教員は現地の日本人社会との良好な関係を普段から築いておくことが大切である。「とても安心感のある修学旅行だった」との声を保護者からいただいた。

25年度は治安の悪化に伴い、国内での実施が不可能になったため、目的を若干変え、国外であるパナマを目的地とした修学旅行を実施した。パナマの日本人経営旅行社の全面的な協力と、ベネズエラ進出企業や大使館の方からの助言をたくさんいただいたお陰で、安全面で全く心配がない有意義な修学旅行となった。

### 4. イベントから脱した現地校との交流

カラカス日本人学校から車を使って10分程度で行き来できる私立校のマリア・アウキシリアドーラ校（以後マリア校）とは、平成17年度から毎年、交流を行っている。それまではマリア校よりもカラカス日本人学校に近い公立の小学校と交流をしていたが、交流のたびにカラカス日本人学校児童生徒に対する侮辱的な言葉が相手校の

児童から出てきたり、カラカス日本人学校児童生徒のスペイン語が不十分なことを馬鹿にしたりする態度が顕著で、交流により得られるものよりも失うものの方が多いと判断し、マリア校との交流に変更したようである。

マリア校は、カラカス日本人学校の事務職員や管理人の子どもが通っているカトリック系の小中併置の私立校である。校舎は各クラスの他に図工室、音楽室、体育館、多目的ルームなどもある。自前のスクールバスはなく、市の所有するスクールバスを活用している。先生方は親日的で児童生徒も日本人学校や日本に対して理解があり、気持ちよい挨拶をしてくれる。マリア校との交流は、はじめのうちはマリア校だけでなく、カラカス日本人学校も会場として交流していた記録があったが、ここ何年かはマリア校のみを会場とした交流となっていた。

23年度のマリア校との交流学習は、次の3つのねらいのもと、マリア校を会場に実施した。①現地の小中学校を訪問し、児童生徒と交流することを通してベネズエラをより深く知り、理解する。②現地校の学習に参加することで、文化や習慣、教育の違いを肌で感じながら、国際感覚をさらに磨く。③毎週行っているスペイン語学習の成果を確かめ、今後のスペイン語学習への意欲づけとする。

このときの交流内容は、まずカラカス日本人学校児童生徒が、マリア校の該当学年のクラスに入って一緒に授業に参加し、その後、全体交流としてカラカス日本人学校から和太鼓の演奏、マリア校から各学年毎に踊りなどの文化的な内容の発表だった。この年の交流はそれまでの交流と同じことをこなすだけで精一杯だったように思う。

24年度の交流学習もマリア校を会場に行われた。この年は派遣教員5名の内、私以外の4名が入れ替わったため、交流学習についても新しく派遣された教員が担当した。担当者は、よく私の意を汲んで真摯な態度で交流の企画・立案、実施に奔走した。形式的には昨年度の交流と同じようにも感じられるが、カラカス日本人学校の児童生徒が参加する教科を十分に考えるなど、担当者の「交流で子どもたちを育てたい」という気持ちが大きく表れたものだった。マリア校との念入りな打合せや、通訳であるカラカス日本人学校事務長との念入りな確認など、この交流を実のあるものにしたという情熱が伝わってきていた。何にもまして、子どもたち一人一人にとって充実し、やってよかったという交流になった。この年の交流の成功が、25年度の交流機会の拡大につながったと思う。

25年度の交流は24年度の交流の成果と反省を生かし、交流を年に一度ではなく、複数回行った。1回目の交流は、「現地校の小中学生との交流を通して、自分から積極的にベネズエラ人と関わろうとする。」と「今後さらに、ベネズエラ人と交流を深めようとする態度を育てる。」の二つのねらいのもとに、運動会前の6月にマリア校の児童生徒の一部26名を招いてカラカス日本人学校で実施した。現在の派遣教員は全員初めてのカラカス日本人学校での交流学習であった。前半は小学2・3年生がおにごこと長縄跳び、4・6年生がTボール、中学2年生がバスケットボールで交流した。後半は全員が紅白に分かれて、ベネズエラ人・日本人混合チームで運動会に実施する紅白玉入れと綱引きを行って交流した。昼食は保護者が作ってくれたカレーライスと一緒に食べながら、楽しく交流した。このスポーツ交流の後に実施したカラカス日本人学校の運動会にはマリア校の児童生徒がたくさん参加した。

この年2回目の交流は、学習発表会前の10月に行った文化交流である。これもカラカス日本人学校で実施し、前半はマリア校の児童生徒に書道の体験をしてもらった。体育館に全員が集まり、学年毎に「友だち」「心」「星」「楽」「夢」を日本人学校の児童生徒が優しく教えながら交流した。後半はカラカス日本人学校の和太鼓の演奏の後、マリア校の児童生徒に和太鼓の体験をしてもらった。

この年3回目の交流は2月にマリア校を会場に予定していたが、残念ながら、カラカスの治安悪化に伴いカラカス日本人学校、マリア校ともに正常な授業ができなくなった



マリア校児童生徒の和太鼓体験

ため中止となった。マリア校の教員と日本人学校の教員との交流計画も立てていたが、日程調整がうまくいかず、実施できなかった。

私のカラカス日本人学校在籍3年間のマリア校との交流学习の実際は、以上の通りである。年度末に実施した学校経営に関する保護者アンケートでも、保護者の方から、マリア校との交流が進んだことに大変良い評価をいただいた。私の派遣期間中に教職員同士の交流ができなかったことがとても残念だが、少なくとも、「現地校との交流」から、「マリア校との交流」に変わった3年間だったと思う。

## 5. おわりに

治安が年々悪化し窮屈な生活環境ではあったが、児童生徒のために何ができるか知恵を絞り、汗を流して職務に励んでくれた派遣教員と現地スタッフ、私たちの活動を全面的に支えてくれた保護者はもとより、大使館や理事會、二水會、日系人會の方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

カラカス日本人学校に児童生徒として、あるいは教職員として席を置いた、たくさんの方々の今後の活躍とカラカス日本人学校の発展を願わずにはいられない。